論文審査の結果の要旨

氏名：徳　本　善　彦
博士の専攻分野の名称：博士（文学）
論文題名：坂口安吾研究
　　――戦間期における文体とジャンルの展開――
審査委員：（主 査）　教授　紅　野　謙　介
　　（副 査）　教授　久　米　依　子　　教授　武　内　佳　代
　　千葉大学教授　大　原　祐　治

1930 年代から 40 年代前半は、いわゆる「戦時期」にあたる。1931 年 9 月の満州事変をきっかけに、満州建国、第 1 次・第 2 次上海事変、そして 37 年から本格的な日中戦争が始まり、太平洋戦争、そして敗戦へと一気に突き進むことになる。わずか 15 年足らずではあるが、しかし、この 15 年間に夥しい数の殺人、死と暴力が日本を起点として、アジア全土に吹き荒れることになる。この異様な時間に立ち会ったものたちは、言葉の無力を知らされ、同じ日本語ネイティブのものであっても、言葉の通じ合わない激しい対立や衝突を目撃したことだろう。殺された小林多喜二と特高刑事のあいだで、あるいは二・二六事件のクーデター将校達と殺された政治家たち、左翼運動の内部でも、軍隊の内部でも、言葉が通じ合わない場面がくりかえされたはずである。いつの時代でも人と人の言葉は通じ合わないとひらき直ることもできるけれども、それがむきだしの暴力をともなって沸騰したのがこの時期だと言っていい。言葉の無力感とディスコミュニケーションを前に、文学者は何を考え、どのような言葉を繰り出したのか。その問いに答えるヒントとして、坂口安吾のテクストがある。

本研究はその坂口安吾の作家としての活動を、出発点からアジア太平洋戦争の終結までの期間に絞って論じることで、安吾文学の基底をなすものについて丹念に考察を行ったものであり、従来の研究をより精緻化するとともに、これまでになかった視点を付け加えるものでもある。

第 1 章「語りの形式から読み解く不合理な「笑ひ」―「風博士」論」は、「風博士」の「演説調の語り」に注目し、牧野信一の作品との類似性を指摘するのみならず、坪内逍遙訳のシェイクスピア戯曲を挙げ、文体における共通性を指摘している。また、芥川龍之介「開化の殺人」を例にあげて、1920～30 年代の文学における「探偵小説」的な構成の影響圏内に安吾の初期作品があることを指摘しつつ、相矛盾する内容を作中に並置することで、安吾の初期作品が「探偵小説」的な構成を意図的に破綻する実験性を帯びていたことについて論じている。

第 2 章「分裂的な思考による小説の文章―「FARCE に就て」の射程」は、評論「FARCE に就て」に着目し、そこで展開される「写実」的叙述批判が萩原朔太郎や伊藤整らの詩論や文章論と通底していることについて明らかにしている。とりわけ、安吾の俳句への言及論ずる第二節の指摘は重要である。また、「FARCE に就て」の後半部分が前半とは一転して「笑ひ」「道化」といった問題を扱う落差に注目しつつ、安吾が前半と後半とを「ところで」という接続詞によって繋ぐ論理展開に触れ、互いに無関係に見える要素を並列させてしまうその語り口そのものに、安吾文学のエッセンスを見出すという点でも重要な試みとなっている。さらに言えば、発表メディアや同時代の出版ジャーナリズムの動向と安吾の文学的営為とを接続しつつ考える必要がある。

第 3 章「〈私〉が随筆を書くということ―『都新聞』「文芸」乱の〈随筆〉を中心に」は、安吾の「随筆」作品群を正面から考察の対象とする。とりわけ安吾にとって大きな存在だった牧野信一の死を「「私自身」の出来事として繰り返し語ること」を通して、「〈私〉について語る」文体と形式を獲得していった過程が重視される。さらにこうした「身辺雑記」的な「随筆」のスタイルを、安吾が後日「小説」として語り直すに際に変容させていくさまを浮かび上がらせている。

第 4 章「断絶としての差異―「イノチガケ」論」は、小説「イノチガケ」前後篇の差異を論じることに徹した意欲的な章である。前篇に関しては、本作の典拠を明らかにしてきた先行研究の成果を踏まえつつ、本作が典拠中に記されていたはずの棄教者・フェレイラに関する記述を脱落させている結果、棄教に関する

負の連鎖が不可視化され、個々の棄教が断片的な事象として語られていることに注目。同様の構造が〈潜入→迫害→殉教〉の事例を列挙するシークエンスの連続においても生じていることを指摘する。前篇、後篇いずれに関する分析も作品の精緻な読解に基づくもので、本作品に関する研究を大きく更新している。

第５章「あなた方の「個性」＝「事実」―「真珠」論」は、「真珠」を伊藤整「十二月八日の記録」（1942年）の叙述と丹念に対比する作業を通じて、構成および方法論の次元において両者が必ずしも大きく異なるものではないことを明らかにし、「真珠」の特異性を語りの問題にあると指摘する。いわゆる「九軍神」に関する「感傷過多」の新聞報道を引用しつつ、報道対象である特別攻撃隊の兵士たちに対して直接的に「あなた方」と語りかける文体で語り直すことで、「常人」ではないとされる彼らの中の「常人」性を浮かび上がらせる断片的な情報（兵士たちの「個性」＝「事実」）を、「物語」に回収することなく提示する点に「真珠」の特異性を見る、という説明は説得的であり、文体および語り口の問題を重視する本博士論文全体の論旨の中においても整合性を持つ。他方で、この小説に関する議論を、随筆と小説の相関について論じた第３章や、歴史記述の問題を論じた第４章と連動させて論じることが必要ではないか。

第６章「切断されたモメント―「黒田如水」における〈講談の技法〉について〉」は、「黒田如水」という作品を 1944 年に差し戻し、作品発表当時の安吾が「講談の技法」に注目していた事実を重視しながら論じている。ただし、吉川英治と坂口安吾を対照的に論じているが、安吾のいう「講談の技法」は吉川英治と安吾それぞれにどのように分け持たれたのか。安吾は「講談」をあくまで「技法」、すなわち歴史的な事象を提示する際の語り口に関する問題として活用しようとした。「黒田如水」の「講談」的な語りが歴史小説「イノチガケ」の語りや「真珠」の語りとはどのような対応関係になるか、という疑問は残る。また、第１章および第２章で論じられた安吾の出発期における問題意識ともどのように関わるかを明確にすべきではないか。本論文が回避した長篇『吹雪物語』に関する考察も今後の課題となる。

以上、いくつか残された課題はあるが、本論文が既存の坂口安吾研究に不足していた観点を示していることは明らかである、とりわけ文体や語りの問題に関して、重要な知見をもたらすものであることは間違いない。近代文学研究のなかでも多くの研究が積み重ねられている坂口安吾研究において、新たな地平を切り開くものと思料される。

よって本論文は，博士（文学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以　　上

令和３年１２月１０日